

Nancy Folbre 著 (Verso 2020年)  
『The Rise and Decline of Patriarchal Systems:  
An Intersectional Political Economy』

中村雪子\*

1970年代以降のフェミニズムは、「家父長制」を女性差別の根源的原因や主要な要素とし、その解消と概念化を試みてきた。資本主義の進展やジェンダー主流化が家父長制を弱体化するという見方や、ジェンダー不平等の原因を全て家父長制に帰すことの問題も指摘され、学術的分析概念としての有効性も問われた。近年、新自由主義的経済体制と並行して台頭した保守主義的ポピュリズムが従来の家族やジェンダーのあり方を標榜する中で、フェミニズムによる「家父長制」再考の動きがある<sup>1</sup>。本書は、フェミニスト経済学におけるそうした試みの一つだろう。評者は、インドを対象としたジェンダーと開発研究に従事し、経済学は専門ではない<sup>2</sup>。そのため、本書評は、主にジェンダー研究、フェミニズム、クリティカルな開発研究の視点による。

著者のN・フォルブレは、フェミニスト経済学において、家族、非市場経済、ケアについて研究を重ねてきた。2部全10章構成の本書の第1部「理論的道具」は、第1章「インターセクショナル・ポリティカルエコノミー(以下、IPE)」、第2章「家父長制であること(the patriarchal)を定義する」、第3章「ジェンダー、構造、そして集合的エイジェンシー」、第4章「横奪、再生産と生産」、第5章「ヒエラルキーと搾取」となっている。第1部は、経済的不平等を創出・維持する「多数の連結するヒエラルキー的諸構造で構成される経済システムの複雑性」(9)を体系的に描き出す。副題のIPEは、マルクス主義とフェミニスト理論を基盤とするフェミニスト・ポリティカルエコノミーに

交差性(intersectionality)の視座をより明確に組み込んだフォルブレ独自の発展的アプローチである。この手法は、従来文化的アイデンティティとされてきた、人種/民族、市民権、セクシュアリティ等を、階級やジェンダーと同等のカテゴリーとし、その経済的帰結が分別・分離と承認/抑圧を随伴し、アウトプットとして複雑な制度構築を伴うと指摘する。IPEでは、市場交換と生産を超えて再生産と社会的再生産をも「経済的なこと(the economic)」とし、人的ケイパビリティと諸制度(アイデンティティと利害を共有する複数の集団に個人を帰属させる)の創出もそこに含む。「経済活動」、「経済的不平等」、「搾取」等の概念の主流のマルクス主義と新古典派経済学の定義も拡張する。加えて、従来のフェミニスト理論で使用されていた資本制と(名詞の)家父長制という枠組みに対し、(形容詞の)家父長制的システムという用語を採用し、多元的構造からなる社会システムと位置づける。その交差性を構成する一部である家父長制的な制度的諸構造は、「ジェンダー、年齢、そして性的指向によって権力を割り当て、歴史的に蓄積の独特な形態—人口増加—に寄与するように再生産を組織」(9)する。従来世帯に限られてきた「家父長制的交渉(patriarchal bargains)」論を社会全体に適用し、ある集団を優位にする諸制度が諸集団間の交渉を通じ創出・維持・強化/弱体化され、交渉はまた諸制度に影響されるとする。個人は、複数の集団(社会的に割り当てられ、変更は容易でない)に帰属し優位と劣位の混じる矛盾した立場に

\*日本学術振興会特別研究員(PD) 横浜国立大学

- 1 フェミニスト国際政治学者のC・エンローは、家父長制を「懐中電灯」とし、「それなしではわたしたちが見落としてしまうかもしれないものに目を向けさせてくれる概念」(Enloe 2017 = 2020:2)とする。
- 2 本書の理解のために読書会を開催した。参加者には改めてここで感謝する。

ある。個人がどの集団に忠誠 (allegiances) を向けるかが交渉結果を左右する。この動態を通じ、諸カテゴリーに基づく交差的で複雑な既得権益・権力集団が (同時に劣位の集団も) 生成される。複雑な交差的構造ゆえに集合的権力の諸構造を含む家父長制的システムは執拗に維持され、時に強化される。

第2部「再構築されたナラティブ」は、家父長制的システムの歴史的盛衰を描く。第6章「家父長制的な上昇 (ascents)」、第7章「資本主義的な軌跡」、第8章「福祉国家の緊張」、第9章「ジェンダーとケアのコスト」、第10章「分断と同盟」からなる。まず、先史時代にまで遡り IPE アプローチに基づき家父長制的諸制度成立期の歴史的展開を追う。さらに、家父長制的システムの動態を主軸に、資本主義的發展から福祉国家の展開の大規模な制度的変化を解釈する。その上で、人的ケイパビリティの生産・維持を含むケアの強制を伴った女性への特化が集合としての女性の劣位につながってきた状況を、家族のケアのコスト、雇用と政策におけるケアペナルティーの側面から検討する。最終章は、再生産をめぐる交渉に関するフェミニズムの達成と可能性を検討し、富の集中と再生産の危機による集合的対立の力関係の変化が資本主義を揺るがす可能性、そして IPE が浮き彫りにする社会集団区分の認識が政治的目標達成のための広い連携につながる展望を論じる。

幅広い学問分野を横断する論理展開は評

者にとって難解だったが、実態としての富の蓄積過程の分析において、再生産の政治、ケアコストの分担が、極めて交差的で複雑な社会集団の交渉過程を通して生じているという本書の主張は説得的だ。しかしながら、一方で、グローバルな資本蓄積過程によって切り崩される物質的基盤を生き、世界規模で不均衡さを増すケアを負担するグローバル・サウスの人種化・ジェンダー化された存在は、あまり焦点化されていないようだ。事例の地域的偏り (北米・欧州中心的) と共に、ポストコロナルな歴史性を踏まえた上でグローバル／トランスナショナルに IPE アプローチを構築する困難さ故かもしれない。交差性論については、学術から国内・国際的政策にまで広く受容されている (しばしば換骨墮胎されて) 現状がある。他方、植民地支配・ポストコロナル状況、そして新自由主義体制へといった展開において、歴史的に構築された権力関係の作用の下、多様な地域内／間において連関しながら生成される「カテゴリー」、特に「人種カテゴリー」について、交差性論が発展した米国外部だけではなく内部でも主流の理解以外の複雑性が捨象されているという批判もある (Grewal and Carby 2023)。このような交差性論の本来の可能性の探求は、著者が提示した挑戦的な議論を精緻化し、グローバル／トランスナショナルな経済的正義実現に必要な「同盟」のための理論構築につながるのではないだろうか。

## 参考文献

- Enloe, Cynthia, 2017, *The Big Push: Exposing and Challenging the Persistence of Patriarchy*, Oxford: Myriad Editions. (佐藤文香監訳, 2020, 『〈家父長制〉は無敵じゃない——日常からさぐるフェミニストの国際政治』岩波書店).
- Grewal, Inderpal and Hazel Carby, 2023, "Beyond Intersectionality: the Geopolitics of Race and Caste," Jennifer C. Nash and Samantha Pinto eds., *The Routledge Companion to Intersectionalities*, London & New York, Routledge: pp. 311-329. (電子書籍)